Ⅰ　倭国社会論

倭国連邦は「狗邪韓国倭地（金海）」から「投馬国（那覇）」までを繋ぐ広大なライン上に存在した超大国だった。連邦は首都を熊本市中央区京町茶臼山に置いた。首都には「大倭王（連邦の王）」が居た。この大倭王は卑弥呼、壱与など特別な時期を除いて、代々「熊氏」の王だったのであろう。よって、熊本の名として残ってきた。
連邦社会と人々の暮らしはどのようなものだったであろうか。

卑弥呼

(1) 卑弥呼をどう読むか。一定しない。
邪馬台国の女王卑弥呼の洛陽古音はpiei miei yaでその訓みはヒムカである。唐の張楚金撰、雍公叡注の『翰苑』には「卑弥娥は惑わすも翻って群情に叶い、台与は幼歯なるも方に衆望に諧う」という句があって、卑弥呼を卑弥娥としている。もっとも、下の句によれば「卑弥は娥惑するも」と読まれたであろうが、作者張楚金は卑弥娥とした文献を見たと考えて誤りあるまい。　　『邪馬台国をめぐる言語10の知識』長田夏樹

「ヒムカ」は「日向」とつながると思われるが、「卑弥呼」は地名を表す言葉だったのであろうか。三木太郎氏は卑弥呼を「ヒ・メコ（日・女子）」と読み、「ヒコ（日・子）」に対応することばと見るべきと述べている。「メコ」は現代でも女性をさす言葉である。
「卑弥呼」とは実名ではない。彼女の職は「祈祷」である。「弥呼」は「巫女」「神子」に通じる職を表す日本語と思われる。「卑」は「日」とし、「日のミコ」と理解するのが常識であるが、この理解に立てば古代インカや古代エジプトなどと同じ太陽神信仰と結びつく。
果たして、卑弥呼はそのような　”穏やかな神”　”遠くの神”　に仕えたのであろうか。

「卑」は「火」ではないだろうか。卑弥呼の都は熊本市中央区茶臼山である。熊本には阿蘇山がある。阿蘇山は「火の山」である。阿蘇山は鉄をもたらす。鉄は冨。鉄は火。
『隋書』は当時の阿蘇山と祷祭の様子を伝える。

有阿蘇山其石無故火起接天者俗以為異因行祷祭

故なく噴火し、石は天に届く。この異因に祈りを捧げなければならない。神と交信できる「ミコ」が居るという。「祈祷」の伝統を引き継ぎ、まだ幼い少女だが、この「ミコ」なら阿蘇火の神に仕えることができよう。連邦の王たちによって彼女が丁重に迎えられたのは連邦内乱を鎮めるためであったが、そのために阿蘇の神への鎮めを求められたからであろう。

(2) 卑弥呼はこのような人だったのではないか、そう思える人が沖縄に伝わる。沖縄は『倭人伝』の「投馬国」である。「投馬国」は女王連合の一つで、同じ文化圏、言語圏であった。自立の道を歩んだ琉球王朝には日本本土では、とっくの昔に滅びた文化、言語が残ってきた。
2020年１２月１３日、NHK放映の「祈りの首里城」において、「神女」が紹介されている。首里城には「御嶽（うたき）」と呼ばれる神聖な場所が10ケ所存在する。神女たちは王族と共に城内の「御嶽」を巡り、王の長寿、五穀豊穣を祈った。この儀式を「百人御物参」という。

神女は黄金の簪で髪をとめ、首に勾玉をかけ、白い衣を着ている。祈りは静かで、敬虔である。初めに両手を合わせ大地を３０回軽くたたく。三十拝という。大地の神を呼び起こし、大地の神に祈っているように見える。火を焚いて激しく動き祈祷するという通俗的なイメージとは全く異なる。
首里城の「御嶽」で祈りを捧げる神女は卑弥呼を彷彿とさせる。「御嶽」は「山」を意味す

る。卑弥呼が住む館でも勾玉を首にかけ白い衣を着た卑弥呼が「御嶽（阿蘇山）」に国の安寧、氏族の長寿、五穀豊穣を祈ったのではないだろうか。
首里城には王と神女が太陽の昇る東に向かって手を合わせる場所があるが、一般家庭では台所に香炉を置き、家族の健康、親しい人の健康を「ヒヌカン」に祈ったという。
沖縄の古語には「エ」と「オ」はない。「遊び」は「アシビ」である。卑弥呼の時代の日本語には母音の「エ」「オ」はなかった。「ヌ」は現代音では、「ノ」である。民間信仰の「ヒヌカン」とは「火の神」となるであろう。人々は「火の神」に祈ったということである。
卑弥呼が「琉球神女」と同じ存在と考えれば、「ヒミコ」は「火神女」［火巫女」がふさわしい日本語と思われる。

(3) 卑弥呼の国は二つの実存不安を抱えていた。一つは「狗奴国」との対立である。原因は卑弥呼と狗奴国王の不仲である。もう一つの不安は、連邦内の姫氏一族と蘇一族の氏族対立である。彼女の祈りは二つの氏族の共存への祈りでもあろう。
『倭人伝』は、「能く衆を惑わす」と書くが、卑弥呼の平和への祈りが人々に通じたということである。

(4) 卑弥呼のルーツについて陳寿は何も記さないが、『記紀』の中にそのルーツを探るヒントがある。卑弥呼の後を継いだのが「壹與（イヨ）」である。「壹與」は「伊代」「一葉」など、現代名に通じる女性の名前である。『翰苑』では「臺與（トヨ）」である。「臺與」も「登世」「豊」などこれまた現代の女性の名前にある。「壹與」「臺與」は卑弥呼という職名と異なり、実名である。この二つの実名を持つ島が『記紀』に現れるのである。

『記紀』「州産み」に「伊豫二名島」が現れる。この島の女王には「二名（ふたな）」があった。「伊豫」と「豊」である。従って、「伊豫二名島」と呼ばれたのである。
『魏志』の「壹與」は『記紀』では「伊豫」である。『翰苑』「臺與」は『記紀』では「豊」である。卑弥呼と壹與は「宗族（同じ一族）」という。つまり、卑弥呼と壹與は「伊豫二名島」の出身といえる。ちなみに、『記紀』「伊豫二名島」とは下関市彦島老町である。ここは天照大神の故郷である。むろん、天照大神と女王卑弥呼とは時代が異なる。天照大神が高天原（下関市彦島老町）に居たのは紀元前である。
卑弥呼は彦島出身である。天照大神の「祈り」を受けつぐ「神女」だったといえよう。卑弥呼は「天照」「天孫ニギギ」「神武」と続く「姫氏」の王「阿米」一族である。連合国の「姫氏」と姻戚関係にあった。よって、連合の王たちによって迎えられたと思われる。

(5) 景行紀に、「八女縣の女神」が登場する。「八女」の地名説話である。

> 景行18年秋7月7日に、八女縣に到る。則ち藤山を越えて、南粟岬を望りたまふ。詔して曰はく、「其の山の峯岫重畳りて、且美麗しきこと甚なり。若し神其の山に有しますか」とのたまふ。時に水沼縣主猿大海、奏して言さく、「女神有します。名を八女津媛と曰す。常に山の中に居します」とまうす。故、八女國の名は此れより由りて起れり。

景行天皇は神武を祖とする九州天皇家の天皇である。御所は福岡県みやこ町にあった。八女の「縣」は「熊襲」の行政区名である。八女を含め、九州西部地域は倭国連邦の統治下である。倭国連邦は行政区名を「縣」とした。一方、景行天皇家は「郡」を行政区名としていた。
景行天皇は「若し神其の山に有しますか」、と問うている。水沼縣主は「女神有します。常に山の中に居ます」と、答えている。この「女神」は人である。祀られた神ではない。「神女」である。「其の山」とはみやま市「女山」であろう。この山はかっては、「女王山」と呼ばれていた。みやま市「女山」にある旧「日子神社」が卑弥呼の館ではないか、と伝わっているが、景行紀の「八女津媛」は『倭人伝』卑弥呼ではない。またその末裔でもない。しかし、「女山」もまた「神の山」として信仰されていたと言えるであろう。

倭王并

倭王、倭女王が238年から続いて登場する。

(1)景初二年六月倭女王遣大夫難升米等詣郡求詣天子朝獻太守劉夏遣吏將送詣京都

景初二年(238年)六月、倭の女王、大夫難升米等を遣わし郡に詣る。天子に詣り、朝献せんことを求む。太守劉夏、吏将を遣わし、京都に送り詣る。

(2)其年十二月詔書報倭女王曰制詔親魏倭王卑彌呼帶方太守劉夏遣使送汝大夫難升米次使都市牛利奉汝所獻男生口四人女生口六人斑布二匹二丈以到

その年の十二月、詔書して倭の女王に報じて曰く。親魏倭王卑彌呼に制詔す。帶方太守劉夏、使を遣わし、汝の大夫難升米、次使都市牛利を送り、汝の獻ずる所の男生口四人女生口六人斑布二匹二丈を奉り以て至る。

(3)正始元年太守弓遵遣建中校尉梯儁等奉詔書印綬詣倭國拜假倭王并齎詔賜金帛錦罽刀鏡采物倭王因使上表答謝詔恩

正始元年(240年)、太守弓遵、建中校尉、梯儁等を遣わし、詔書と印綬を奉じて、倭國に詣る。倭王・并に拝假し、詔を齎し、金帛・錦罽・刀・鏡・采物を賜う。倭王、因りて使に上表、詔恩に答謝す。

(4)其四年倭王復遣使大夫伊聲耆掖邪狗等八人上獻生口倭錦絳青縑緜衣帛布丹木短弓矢掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬

その四年(243年)、倭王、また使大夫伊聲耆、掖邪狗等八人を遣わし、生口・倭錦・絳青縑・緜衣・帛布・丹・木・短弓・矢を上献す。掖邪狗等、率善中郎将の印綬を壹拝す。

(5)其八年太守王頎到官倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和遣倭載斯烏越等詣郡相攻狀説遣塞曹掾史張政等因齎詔書黄幢拜假難升米爲檄告之卑彌呼以死大作冢徑百餘步徇葬者奴碑百餘人

その八年(247年)、太守王頎、官に到る。倭の女王卑彌呼、狗奴國の男王卑彌弓呼と素より和せず。倭の載斯烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説く。塞曹掾史張政等を遣わし、因って詔書・黄幢を齎し、難升米に拝假せしめ、檄を為りて之を告喩す。卑彌呼以て死す。大いに冢を作る。徑百餘歩。徇葬する者、奴婢百餘人。

景初二年(238年)は「倭女王」である。正始元年(240年)は「倭王」である。区別されている。正始元年の倭王の文をどう読むか。

拜假倭王并齎詔賜金帛錦罽刀鏡采物倭王因使上表答謝詔恩

倭王に拝仮し、ならびに詔を齎し、金帛錦罽刀鏡采物を賜う。倭王、使に因って上奏し、詔恩を答謝す。　　(石原道博編訳『魏志倭人伝』)

「并」の通常の用法は「併(あわせる)」「並(ならぶ)」である。普通はこの意味で読まれている。「拝假倭王」は「倭王に拝假す」、「齎詔」は「詔を齎(もたら)す」である。「賜金帛錦罽刀鏡采物」は「金帛、錦罽、刀、鏡、采物を賜る」である。

「并齎詔」は「ならびに詔をもたらす」と読まれている。だが、「拝假す、ならびに、詔を齎す」という用法と考えられるのであれば、「拝假す、ならびに、詔を齎す、ならびに、金帛錦罽刀鏡采物を賜う」とならなければなるまい。また一つ「并」が必要である。

だが、「拝假す－齎す－賜う」の三つの行為の間に、「ならびに」は不必要であろう。

「并」は「ならびに」ではない、と思われる。「并」には別の用法がある。それは人名としての用法である。「かつ」と読む。この文では「倭王并(ワオウ・カツ)」と読むべきではなかろうか。「太伯」の伝統を継ぐ中国一字名である。

帯方郡太守弓遵の使者、建中校尉、梯儁が倭国にやって来た。使者は王と会った。王は名を名乗った。「并(カツ)」と。

拜假倭王并齎詔賜金帛錦罽刀鏡采物
倭王并に拜假す。詔を齎(もたら)す。金帛錦罽刀鏡采物を賜う。

「并」は「克」「葛」、或いは「勝」であろうか。6世紀、筑紫の君「磐井」の子どもは「葛子」と言った。この名前も「かつし」と読むべきである。『神武紀』には「兄猾・弟猾」が登場する。彼らの名前も「猾(カツ)」である。この兄弟は「菟田縣(小倉南区)」の長官で、「熊襲(熊氏)」の国の行政官であった。

正始元年(240年)「并」は男王である。この時、女王卑弥呼は健在である。卑弥呼の死を伝える記事は247年である。238年から247年まで卑弥呼は連邦国王の座にあった。この倭王は連邦の王ではない。21国のいずれかの国の王か、それとも、伊都国の王か、どちらかであるが、郡使は伊都国に常駐したという記事から考えると、倭王「并」は伊都国王、とするのが妥当である。外務省は伊都国に置かれ、伊都国王は外務大臣といえよう。
「詔」と「金帛」「錦罽」「刀」「鏡」「采物」は連邦国王卑弥呼に届けられるものである。伊都国王はそれらを女王の都へ送った。使者は川尻の港に着くと荷の梱包を解いて披露しながら、熊本市中央区京町茶臼山に上った。

載斯烏越

遣倭載斯烏越等詣

少帝正始八年(247)年の記事である。「烏越」は「ウエツ」であろうか。不明なのは「載斯」であるが、現代日本語に変換すると「祭司」「祀司」であろう。
烏越氏は卑弥呼の国の葬祭を司る神官だったのであろう。倭国連邦が存在した九州西部の都市には多くの古墳が存在する。死者を埋葬するとき、葬儀が行われたのは当然で、その葬儀を司る祭司が烏越氏だったというわけである。
祭司烏越は連合22国の一つである「烏奴国(宇土市)」の出身であろう。姓は「宇」、名は「悦」であろうか。「祭司・宇悦」なる人物である。

難升米

景初二年六月倭女王遣太夫難升米等詣郡求詣天子朝献
景初二年六月、倭の女王は太夫「難升米」等を遣わした。彼は帯方郡まで行き、「天子に詣りて、朝献したい」と求めた。

「難升米」は「米」が名で、中国一字名である。「難升」の「升」は「将」であろう。「米」は武官である。「魏」への使者が武装していたのは当然で、軍人を中心とした一行だったのである。「難」の日本語が難しいが、「南」であろうか。「南将・米」が肩書き及び名となろう。

『後漢書』に次の文がある。
安帝永初元年倭国王帥升等献生口六十人願請見

通常「倭の国王帥升らが生口六十人を献じ、請見を願うた」と読まれる。「帥升」は倭国王の名と捉えられている。だが、「升」は「将」ではないだろうか。とすれば、「帥升」は王の名前ではなく、「帥将」の意で「軍司令官」ではないだろうか。
ここには、「等」とある。倭王一人を云うのに「等」は不要である。「倭国王」「司令官」等、つまり、「王」と「将」の二人が主語となろう。「升」を使った官名は他にもある。倭国の官に「弥馬升」がある。この「升」も「将」で、「山(国の)将」の意となる。「山結」の軍を統率する司令官であろう。

生口

『倭人伝』に「生口」という不思議な人物が登場するが、解釈は一定しない。「奴隷説」「留学生説」「捕虜説」「捕魚者説」等あるが、その原因は借字と日本語が一致しないからである。「生口」を「セイコウ」と読む研究者がほとんどであるが、この読みでは日本語にならない。

(1) 「生口」は呉音で「ショウク」と読む。「ショウク」を日本語で書くと、「小工」である。
「生口」＝「小工」。「工」は職人を表す日本語である。「小工」は現在滅びているが、対の言葉である「大工」は生きている。「小工」という言葉が滅びたのは実体がなくなったからである。ゆえ、「生口」と「小工」を結びつけることができず、解釈が混乱したのである。

(2) 卑弥呼の国は「大工」「小工」による手工業製品の一大産地だった。魏皇帝に献上された「班布」「倭錦」「緜衣」「短弓矢」などは「山結」の手工業品である。「倭錦」とは絹で、倭国連邦国の人々は、桑を植え、養蚕して倭製の絹布を生産していた。男女「小工」が倭国の養蚕業、手工業の担い手だったのである。

(3) 『倭人伝』には、「男子無大小皆鯨面文身」とある。「大小」は「大人と小人（子ども）」の意であろう。そう考えると、「小工」とは「小人（子ども）の工人」の意で、「大工」は「大人の「工人」の意となる。
機織りは根気のいる仕事ではあるが力は要らない。「機子」と伝えられるように昔から子どもの仕事だった。魏皇帝の前に立った「生口」とは、子どもだったというわけである。

持衰

其行来渡海詣中国恒使一人不梳頭不去蟣蝨衣服垢汚不食肉不近婦人如喪人名之為持衰若行者吉善共顧其生口財物若有疾病遭暴害便欲殺之謂其持衰不謹

倭国の使節団一行が海を渡って中国に詣る。恒に、一人は頭を櫛けずらず、蟣蝨（しらみ）をとらず、衣服は垢に汚れたままで、肉は食べず、婦人を近づけない。喪人のように振る舞う。これを名付けて「持衰」とする。もし一行が吉善であるならば、使節は協同して「小工」、財物を持衰に与える。もし、疾病、暴害に遭えば「持衰」を殺そうとする。「持衰」が謹まなかったからだというのである。

(1) 「其行来」は「その行来」と読むべきではない。「往来」はあっても「行来」はない。「其」は「倭」をさすが、「行」は名詞、主語である。現代日本語でも「ご一行様」と使われるように、「行」は「一行」の意味で、「其行来」の訓みは「その（倭の）一行が来たる」である。

(2) 倭の一行は中国に行く際、「持衰」を同行していた。難語であるが、その役割から考察すると、「持衰(ジサイ)」とは「除災（ｼﾞｻｲ）」であろう。「災いを除く者」という意味である。「除災（ｼﾞｻｲ）」は「除目（ジモク）」と同じく、呉語である。

(3) 「持衰」を非科学的というのは簡単であるが、現代日本でも「除」の意味を持った風習が民間でよく見られる。代表が「厄除」「除厄」である。「厄年」に当たる多くの人が神社仏閣を訪れる。「厄年に厄除けしなかったから病気になった」、というようなこともよく云われる。これは「持衰」の役割と変わるまい。現代では「除災」は漢音で「じょさい」と読まれる。意味は文字通り「災いを除くこと」である。「除災招福」とも云われる。「方除け札」というものも売られている。「魔除け」「八方除災」もある。みな、「除」をつかう。
『倭人伝』「持衰」は私たちの身近な所にいる。

(4) 「持衰（除災）」は、一行が旅で「疾病」「暴害」に遇ったら殺されるという、本人の意志、努力を超えた仕事についた。現代の神・佛は願いが成就しなかったからといって殺されることはない。だが、「持衰」は生身の人間である。「持衰」はこの任務を誇りとしたか、不運と感じたかは分からない。一行の命運を背負った「持衰」は元々そういう専門職だったのか、それとも、その都度選出されたのかどうかも不明であるが、「持衰」の役割が「人」から「神」に移ったのは確かであろう。旅に災難はつきものである。その度に人が殺されてはたまらない。

大人・下戸

下戸與大人相逢道路逡巡入草伝辞説事或蹲或跪両手據地為之恭敬対応声曰噫比如然諾

下戸が大人と道路で相逢えば、逡巡して草に入る。辭を傳え事を説くには或いは蹲（うずくま）り、或いは跪（ひざまづ）く。兩手を地に據（きょ）す。これが恭敬（きょうけい）を為す。對應の聲は噫（あい）と云う。（中国語に）比するに然諾（ぜんだく）の如し。

倭国連邦には少なくとも二つの階層があった。「大人」と「下戸」を記録している。『三国志』「魏志濊南伝」に「漢より以来、其の官に侯、邑君、三老有り。下戸を統主す」とある。

（『邪馬一国の道標』p179古田武彦著）

「大人」「下戸」は魏の言葉である。倭語ではないが、「倭国の大人」とは「姫氏」「熊氏」王家一族であろう。「倭国の下戸」がどのような階層を表すか不詳である。
『倭人伝』は「大人皆四五婦下戸或二三婦」と書く。「下戸」にも妻が２～３人居る。「下戸」は独立した生計人である。「奴隷」とは云えないであろう。

「逡巡して」とは「立ち止まり」、「草に入る」とは「道を譲る」というほどの意味であろう。当時の道が広くはなかったというだけのことである。「草」に格別の意味があるわけではない。
「比するに噫とは然諾の如し」と説明がある。「然」は「その通り」、「諾」は「答える」の意である。「噫」は、「はい」、または、「あい」であろうか。どちらも日本語である。
下戸が使った「噫」は中国語と比べてみると「然諾」と同じだと書いている。「噫」は現代日本語で言えば「はい」である。「はい、わかりました」という意を持つ日本語「噫」がこの頃から使われていたという。日本語「はい」の歴史の長さを感じる。

文身

今倭水人好沈没捕魚蛤文身亦以厭大魚水禽後梢以為飾諸国文身各異或左或右或大或小尊卑有差

今、倭の水人、好く、沈没して、魚蛤を捕える。文身して亦以て大魚、水禽を厭う。後梢以て飾と為す。諸国の文身は各（おのおの）異なり、或は左に、或は右に、或いは大に、或は小にして尊卑に差がある。

「山結」の水人（漁師）は好く潜って魚や蛤を捕らえる。「山結」の多くの国は海に面した国である。豊饒の海、有明海がある。漁業を生業とする「水人」は今も変わらない。素潜りの漁法も受け継がれている。奈良盆地に「水人」の痕跡が残るであろうか。

伊支馬

『紹熙本』は、女王連邦の官名を記録している。

官有伊支馬次曰弥馬升次曰弥馬獲支次曰奴佳鞮

官名である「伊支馬」はどう読むのか。「馬」は「マ」で、官名は「イキマ」であろう。八女市宮野に「宮野生目八幡宮」がある。「生目」は「イキメ」と読まれている。「マ」が「メ」に変化したと考えると、この神社は、『倭人伝』が伝える「官・伊支馬」を祭神としているかもしれない。

「伊支馬（生目）」は行政官トップで、いわば、連合の総理大臣であろう。次の官が「弥馬升」である。ここでは「邪馬」と書かずに「弥馬」と書いているが、同じである。「升」は「将」であろう。「弥馬升」は「山結の将」の意味となり、軍事大臣であろう。「弥馬獲支」も「山結の獲支（不詳）」の意で、正確には分からないが、国務大臣であろうか。

岩戸山歴史資料館
（八女市吉田1396－1）
（2016年閉館）

Ⅱ　『倭人伝』は陳寿と倭人の共著

三木太郎氏は著書『魏志倭人伝の世界』で、岡田英弘氏がその著書『倭国の時代』に

もしも『魏志倭人伝』を、本気でわが民族の歴史を復原する材料に使おうというのなら、矛盾した言い方で申し訳ないが、その内容をあまり本気で受けとってはいけない。

と書かれた事に対して、次のように述べられている。

たしかにどんな書物も時の政治･権力や時代意識と無縁ではあるまい。だが、そうした大きな力とかかわりながら、なお比較的に客観性を保持し、本来の目的性を貫くことが、史家のあるべき姿だったのではないか。中国の史書に、司馬遷の『史記』以来、そうした記録者（史家）の精神が流れていることを否定することはできないように思われる。
時代の制約や知識の不正確さが原因で起こる史書の誤りと、思想家のイデオロギーや現実政治への対応の姿勢と同次元の現象と見て、中国史書の事実性を不当におとしめることは、むしろ心して避けるべきではないだろうか。

肝に銘じなければなるまい。唐には李賢という、死をも覚悟して母の専制政治を告発する注釈『後漢書』を作成した皇太子もいた。いかに相手が強大な権力であろうと、真実を貫く人は居る。そして、いつの時代にもそのような人はいる。人間の精神性を不当におとしめてはなるまい。

だが、三木氏の憂慮にもかかわらず、明治から現代に至る我国の『倭人伝』研究は、「本気で受けとってはいけない」という岡田氏の”警告”に従っている。

ほぼ定説（常識）となっていることがらがある。
*『倭人伝』女王国旅程における方角「南」は「東」の誤記である。
*『紹熙本』「邪馬壱」は「邪馬台」の誤刻である。
*『紹熙本』「邪馬壱」は7世紀～12世紀に生じた「邪馬台」の誤写である。
*『後漢書』李賢注「邪摩惟」は「耶摩堆」の誤刻である。

しかし、である。

* 現存する全版本「旅程」は全て「南」は「南」、「東南」は「東南」で一致している。
* 「邪馬台」とした版本と「邪馬壱」とした版本のどちらも現存する。
* 「邪摩惟」と注記した『後漢書』版本は現存するが、「邪摩堆」と注記した『後漢書』版本は見つかっていない。

これが中国史書の事実である。

我国研究者の「誤記」「誤写」「誤刻」説オンパレードは「史家の事実記録の精神性」「刊本作製学問集団の見識・調査研究」「書写生・版工・印刷工の専門性」への「貶め」そのものではないだろうか。
「(私はそれと分かっているが)歴代中国王朝の史家、学問集団、あるいは技能者集団は誰一人として「誤記」「誤写」「誤刻」に気づかず、訂正、改訂も行わず史書を編纂、刊本を作製してきた」という”思い込み”はあまりにも不遜ではないだろうか。
「南」は「南」、「東南」は「東南」、「邪摩惟」は「邪摩惟」、「邪馬台」は「邪馬台」、「邪馬壱」は「邪馬壱」、それぞれ「事実」として「本気で受けとり」、そのまま研究の原点に据えることが我が国の研究者のとるべき姿勢と私には思われる。それが三木氏の本意であろう。

『倭人伝』についてはその信憑性を疑う意見が多くある。「方角南は東の誤りである」というのはその代表である。他にも誤りと指摘する事項は数多い。「中国人は歴史の真実を書かない伝統を持っている」というような一般論さえある。
確かに、『倭人伝』は西晋陳寿が書き記した本である。著者は中国人である。この事実が我が国の研究者の『倭人伝』不信の根本にあるように思える。

『倭人伝』は洛陽から見て遠く東の海中に存在する「倭」について、２２の連邦国名、女王、官、戸数、身分、家族制度、衣服、農作物、動物、木、武器、食事、葬儀、税、果ては文身、祈祷などの風俗に至るまで、ありとあらゆる情報を収集し記録している。我が国の最古の史書である『記紀』に韓国、中国の情報が少しでも記載されているであろうか。
『日本書紀』は天皇の欠落史を『百済本紀』などから補っているが、これは百済に関する情報を記載したのではない。百済が我が国について収集した記録を借用したというだけのことである。
歴代中国王朝が「情報国家」であり、「記録国家」であることは、我が国の『記紀』と比較して歴然としている。
『倭人伝』への感想を述べるとしたら、「その記事には誤りがある」という不信感とは正反対である。「なぜ、これほど正確な記事を書くことができたか」という驚嘆である。
陳寿女王国旅程は現代の正確なネット情報に慣れた私たちから見れば完全だとは云えない。
だが、「国」「方角」「里」は現代地図上復元できる。実に正確である。
女王国旅程は魏にとって異国の旅程である。その旅程記事が魏使の見聞、調査によるものだと言うにはあまりにも正確、あまりにも詳細すぎるのである。

陳寿記事は倭国情報

陳寿は女王国ルートを「倭」と「魏」の外交ルートとして書き、現代の私たちもそう受け止めているが、元来は外交ルートではない。
魏朝以前の遙か昔から「倭国」の人々が大陸の窓口である「狗邪韓国倭地」と「伊都国」を結ぶ経済交流・文化交流のために切り開いた交易ルートである。

> 收租賦有邸閣國國有市交易有無使大倭監之
> 国々に市がある。物々交換が行われている。その商取引を取り締まる役人がいる。

倭国ではすでに商業が発達していた。国内での商業は勿論、外国との貿易も発達していた。狗邪韓国倭地はその拠点だった。この窓口を通して倭国は中国との外交関係を持った。「狗邪韓国倭地～伊都国」が外交ルート、交易ルートである。倭国連邦がこのルートを厳重な管理下に置いたのは当然である。伊都国には「一大率」が常駐していた。その任務は狗邪韓国と伊都国を結ぶ交易･外交ルートの安全確保であろう。

このルートの「国」「方角」「日数」「戸数」「官」などは倭国の基本台帳である。その情報を陳寿は知っていた。だが、一方で、倭国連邦の中枢である２２人の王とその国について陳寿はほとんど何も知らなかった。連邦側は２２の国名は教えたが、それぞれの王名、それぞれの国の戸数などは教えなかった。国力を測る最も基本である米の生産について陳寿は何も知らなかった。最も貴重な鉄についても陳寿は何も書けなかった。
ここには倭国連邦側の情報管理があったと考えてよい。重要な情報は渡さなかったのである。
このように『倭人伝』を分析すれば、『倭人伝』は中国人陳寿が作った史書であるが、その基となった情報は倭国の提供であると言えよう。

女王の都の位置は倭国の機密

「倭人伝は倭国管理下の情報である」と考えれば、不弥国から女王国への最終ルートを陳寿が書けなかったことに納得がいく。
陳寿は不弥国までの「方角」「里」を知っている。郡使が往来する外交ルートは「狗邪韓国倭地～伊都国」である。奴国、不弥国はルート外である。だが、陳寿が不弥国までの里程を書いていることから考えると、郡使は不弥国までは行ったのであろう。伊都国から不弥国までは200里、20kｍである。さして遠い道程ではない。日帰りできる。
今、郡使は不弥国まで来ている。不弥港に投馬国行きの船が停泊している。彼は投馬国へは二十日の航海であるとの情報を得る。その方角をまちがえることはない。有明海は南にのみ開けている。
投馬国情報は倭国のものである。『隋書』が「夷人は里を知らず」というように里程は知らなかった。「日程表示」は倭国のものである。
陳寿はその情報を記した。「南水行二十日至投馬国」である。

ここで郡使は投馬国行きの船に乗ったのであろうか。
不弥港に立つ郡使に「投馬国乗船」はありえないと思われる。郡使はすでに「狗邪韓国～対海国」「対海国～一大国」「一大国～末盧国」の海を渡ってきている。郡使はその距離を古周尺3000余里と記した。実際の距離は254kｍである。むろん彼らは所要日数も分かっている。私たちが計算したように６日である。『唐六典』の水行速度は「水行一日100里＝43.5kｍ」である。この速度で254kｍは5.8日。『唐六典』でも６日である。
金海から唐津の海は６日だった。そこで郡使は投馬国二十日を距離に換算できる。

狗邪韓国～末盧国3000里は６日。 不弥国～投馬国は20日。 不弥国～投馬国は約10000里。

投馬国は自分たちが渡ってきた狗邪韓国～末盧国の3.３倍の日数を要する。郡使はそのように計算する。郡使は不弥港に立ち、有明海を南に進む投馬国行きの船に乗らない決断をする。

”投馬国は遙かに遠い国である。しかし女王の都はそんなに遠くない。この南にある”

都の位置は倭国にとってトップシークレットである。倭国は不弥国から先の女王の都へのルートは極秘とした。陳寿が女王国への最終旅程を書けなかったのはその情報がなかったからであ

る。
実際の女王国ルートは不弥国からの有明海を南へ水行する。船は島原付近まで投馬国への船と全く同じ航路をとる。「投馬国有明ルート」と「女王国有明ルート」は見分けはつかない。非公開の「女王国ルート」は公開「投馬国ルート」の蔭に隠れた。後の世の中国人史家も我が国の史家もこの隠れた不弥国～女王国有明ルートは発見できなかった。
女王の都は熊本平野の北部、熊本市中央区京町である。都へは有明海を川尻町まで航海して上陸後、薩摩街道を北上する。単純な道程ではない。仮に、筑後市から有明海に船出しても、中央区京町に到達することなど誰にできようか。AIを駆使する現代研究者にしても女王の都に到達できた人は誰一人いない。

不弥国は女王国への出入国管理を担当する国である。女王国への入国も女王国からの出国も不弥国の官が担当する。不弥国副官「卑奴母離」とは「人守（ひともり）」と読める。出入国者の監督官である。倭国は港に「官卑奴母離」を置き、首都防衛に細心の配慮をしていたといえる。

『御覧倭国伝』旅程は”虚”

『太平御覧』は十世紀編纂である。撰者は李昉･徐鉱らである。三木太郎氏は『太平御覧魏志』について詳細な論証に基づいて、「やはり、（御覧魏志の）10世紀成立説は成り立たず、魏略→御覧魏志→倭人伝の成立順序は認められるべきだ、との結論に達したのである」と主張されている。（『魏志倭人伝の世界』p13）

『太平御覧魏志倭国伝』の旅程は次である。

又南水行二十日至於投馬国 又南水行十日陸行一月至耶馬台国女王之所都

三木氏のいうように、『太平御覧魏志』が「『倭人伝』の草稿、”原魏志”だ」とすると女王国は投馬国の南、水行十日陸行一月に存在したことになる。
旅程分析はすでに試みて結論を示したので改めていう必要はないが、この旅程は実ではない。「陸行一月」は常識で考えても600kmとなる。投馬国をどこに比定しようと、「南水行30日南陸行30日」の国はない。『太平御覧魏志』旅程は明らかに「虚」である。

陳寿の女王国最終旅程は「南至耶馬壱国女王之所都水行十日陸行一月」である。陳寿の「南至耶馬壱国」は「略形」である。補正は「投馬国の南」か「不弥国の南」かのどちらかであるが、「投馬国の南」としたのが『太平御覧倭国伝』である。この国は実在しない。
そこで、我が国研究者は「南は誤り。本当は東」と訂正する。陳寿の「南」のみならず、李昉･徐鉱らの「南」も誤りであると訂正することになるが、日本地図を知っていればこのように訂正するのはやむを得ない。投馬国の「南」には国が存在しないことは誰でも分かる。

我が国研究者の訂正に従って、「南」を「東」に変えてみよう。「東」「水行」は瀬戸内海、または日本海となり、日本地図に存在する。ではこの「東ルート」を進んでみよう。
『唐六典』の速度は「水行一日100里」「陸行一日50里」とする。この一里は漢尺435mである。「水行一日100里＝43.5km」「陸行一日50里＝21.8km」となる。

水行10日＝漢尺1000里＝1000×435m＝435km 陸行31日＝漢尺1550里＝1550×435m＝674.25km

水行10日陸行31日は計1109.25kmとなる。

我が国研究者が訂正した東の国を日本地図で見つけることができるであろうか。見つからないことはないが、仙台に至る。我が国研究者の「邪馬台国」は遠すぎる。
『太平御覧魏志倭国伝』の女王国は存在しない。「方角東訂正」の我が国の研究者の女王国も存在しない。「不弥国南1300余里」の女王国のみが存在する。

『太平御覧魏志倭国伝』と『倭人伝』はどちらが先にできたのか？両本の旅程の関係を見れば二通りの順が考えられる。

(1) 太平御覧倭国伝→(略記)→倭人伝
(2) 倭人伝→(補正)→太平御覧倭国伝

どちらかであるが、『御覧倭国伝』は陳寿を補正してできあがった旅程と捉えるのが自然である。陳寿は「略」があるが「実」である。一方、『太平御覧倭国伝』は「略」はないが「虚」である。「虚」を略して「実」が生まれたとは考えにくい。『御覧魏志』は陳寿の「略」を補正した。その補正が誤りであった。そして「虚」が生まれた。こう考えるべきであろう。

『倭人伝』は陳寿と倭人の共著

陳寿は郡使情報と倭国情報によって『倭人伝』を著した。倭国は全ての情報を公開したわけではないが、公開した情報は真実である。『倭人伝』は中国人陳寿が書いた本であるが、その情報は倭国発である。『倭人伝』は陳寿と倭人の共著といってもよい。
陳寿の「南」は倭人が認識していた「南」でもある。陳寿の「東南」は倭人の「東南」でもある。倭人の日常生活における「南」であり、「東南」である。この「南」「東南」を誤写として、「東」「東北」への訂正は研究者としてあるまじき行為である。「陳寿の南は東の誤りだ」といった発言は天に唾する行為である。

岡田英弘氏は「本気でわが民族の歴史を復原する材料に使おうというのなら、矛盾した言い方で申し訳ないが、その内容をあまり本気で受けとってはいけない。」と述べているが、真理は逆説的である。こう言うべきである。

> 『倭人伝』はわが民族の歴史を復原する材料である。何故なら、『倭人伝』は陳寿と倭人による共著と言えるからである。その内容を本気に受けとるべし。

『倭人伝』は陳寿とわが民族による共著である。そこに記された歴史はわが民族の歴史である。陳寿は都を熊本市中央区京町茶臼山に置き、「山結」と名乗り、歴代中国王朝、歴代韓王朝と交流した３０倭国連邦について正確に記録した。

『倭人伝』は神武天皇家の歴史書ではない。倭国と神武天皇家とは全く別の国家である。
『倭人伝』を神武天皇家の歴史書『記紀』によって解読するという手法は誤りというほかない。
ヒミコはヒミコ、アマテラスはアマテラス、別人である。邪馬台は邪馬台、ヤマトはヤマト、異なる首都である。

陳寿は極東アジアにおいて国際的な地位を確立していた「倭国連邦」を記した唯一の史家である。その著書は審正と受け止めて研究されるべきである。
最後に、陳寿に対する不審の源である旅程について、紛れのないように里程、日程を日本地図に示して陳寿の名誉を回復しておきたい。

(1) 帯方郡から女王の都までは「萬二千余里」である。
　帯方郡から狗邪韓国倭地(金海)まで……7000余里
　狗邪韓国倭地(金海)から末盧国(唐津市)まで……3000余里

末盧国（唐津市）から女王の都（中央区京町）まで……2000里

(2)　「水行十日陸行一月」は帯方郡から女王の都まで所用日数の合算である。
帯方郡から狗邪韓国倭地（金海）まで……水行2日・陸行28日
狗邪韓国（金海）から末盧国（唐津市）まで……水行6日
末盧国（唐津市）から女王の都（中央区）まで……水行2日・陸行3日

(3)　「水行十日陸行一月」は萬二千余里＝1109.25kmである。

(4)　「南至投馬国水行二十日」は女王国とは別ルートである。「水行二十日」は870kmである。
投馬国は那覇市である。